ワークシート 「深める・広める」

年　組　番号(　　)　名前

外国人と話そう、知ろう

新田さん（磐城高）発案「歩み寄りへ」

「文化の違いを学び合い、差別や偏見がなくなる地域にしていきたい」と話す新田さん

多文化共生が根付くまちに―。いわき市の高校生が23日、同市で英語と日本語を使いながら、さまざまな国の人と交流するイベントを開く。一部の外国人の迷惑行為などで排外的な声が広まる中、イベントを主催する新田和奏（かなで）さん(17)＝磐城高2年＝は「互いに理解し、歩み寄ることが大事」と異なる文化に対する相互理解が進む未来を思い描く。

イベントは「Language Exchange（ランゲージエクスチェンジ、言語交換）」と呼ばれる形式で、新田さんが今年7月に留学したオーストラリアで行われていた取り組みを参考にする。当日は英語と日本語で自己紹介や討論などを行う予定で、誰でも参加できる。市国際交流協会によると、高校生がこうしたイベントを企画するのは珍しいという。

学校の探究活動で多文化共生をテーマにする新田さん。国内外の高校生が国際社会で活躍できるグローバルリーダーを目指す文部科学省の「ワールド・ワイド・ラーニング（WWL）コンソーシアム構築支援事業」に参加、イスラエルやフィリピンの人と交流したことが異文化共生に関心を抱くきっかけだった。

より学びを深めようと今夏、多民族国家として知られるオーストラリアへ短期留学した。現地では語学学校での学習に加え、自ら言語交換イベントに2回参加した。「ルーツが違っていても、話してみると『同じヒト』だと思えた」と、イベントをきっかけに交流サイト（SNS）で外国人と友人になることができた。

また、オーストラリアでは「カウチ」と呼ばれる留学生が集まれる場所をはじめ、移民や留学生へのサポートが行き届いており「多文化が日常生活の一部になっている」と肌で感じた。一方いわき市で自らが実施したアンケートでは、外国の文化や多文化について知る機会が不足している実態が浮かんだという。

国内では外国人政策に対する排外的な風潮が広まっている。新田さんは異文化への理解が進まず、壁をつくってしまっていることが要因の一つと考え、事業を立案。いわき市で暮らす外国人や外国にルーツを持つ人にとっても日本語や日本の文化を学び他国の人と交流できる場が増えることを期待する。

多文化共生が進んだ未来とは―。新田さんは「互いに理解し合い、学び合える社会で、誰もが自分らしく生きられる社会だと思う」と言い切った。

▲11 月 16 日　福島民友新聞掲載

記事から知り得たこと

調べてわかったこと、考えたこと

疑問に思ったこと、調べてみたいこと

「多文化共生が根付くまちに」の思いを持った新田さんの取り組みについて、あなたの感じたことをまとめてみましょう。